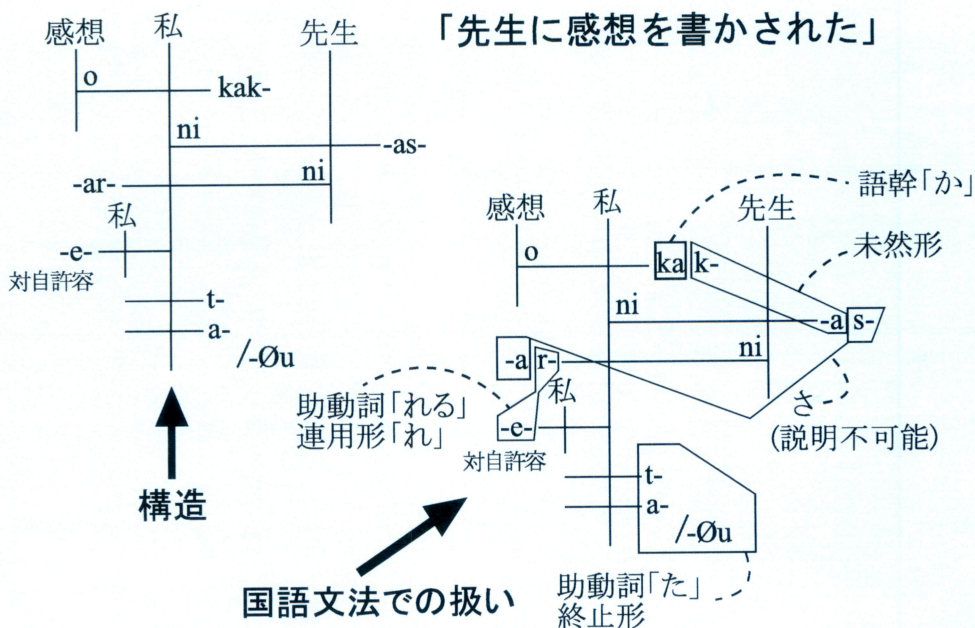


日本語・中国語・モンゴル語

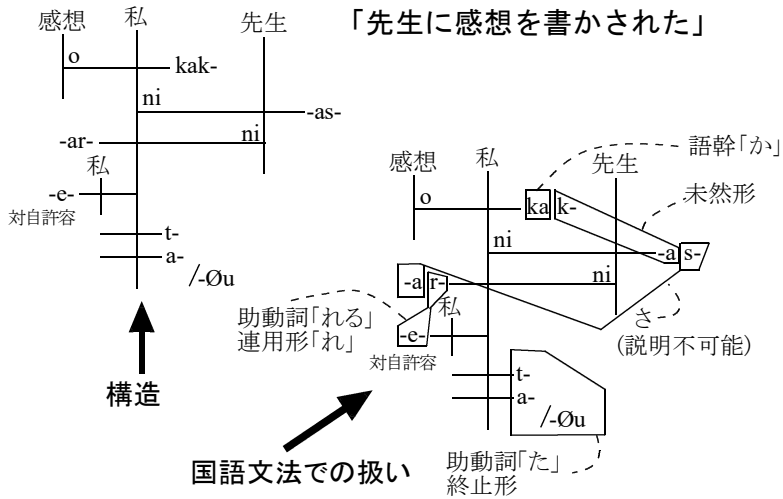
—— 日本語構造伝達文法・発展E ——



今泉	喜一	日本語・日本語教育・モンゴル語
木村	泰介	日本語
関口	美緒	日本語
銀	桩	モンゴル語と日本語
辛	奕羸	中国語と日本語
蔣	家義	中国語(構造伝達文法)
孫	偉	中国語と日本語
陶	天龍	粵語麻垌方言(構造伝達文法)

日本語・中国語・モンゴル語

—日本語構造伝達文法・発展E—



今泉 喜一	日本語・日本語教育・モンゴル語
木村 泰介	日本語
関口 美緒	日本語
銀 粧	モンゴル語と日本語
辛 奕羸	中国語と日本語
蒋 家義	中国語（構造伝達文法）
孫 偉	中国語と日本語
陶 天龍	粵語麻垌方言（構造伝達文法）

E まえがき

本書は「日本語構造伝達文法」の研究書シリーズの6冊目である。(入門書シリーズの『日本語のしくみ』は、(1)～(5)の5冊出版されている。)

本書は論文9編で構成されている。研究者は8人ではあるが、うち、3人は新登場である。ほかに問題を提示してくださった日本語教師の方が1人いる。

この「まえがき」では、今泉が、その9編の各論文について、簡単に紹介しておく。

E I 論文 国語学への5つの提言

—文法はローマ字で—

今泉 喜一

まず、国語文法の問題点を指摘する。国語辞典には、「よむ(読む)」という動詞が、「よ・む」という形で載せてある。「よ」が語幹で、「む」が活用語尾ということである。しかし、これには何の科学的根拠もない。正しくは yom-u である。語幹は yom-で、語尾は -u である。現在の「よ・む」という表し方は、yom-u へと、すぐに訂正しなければならない。すべての国語辞典の大きな訂正になる。日本人が何の疑問もなく「よ・む」と分析していたのは、文法分析に「かな」を使っていたからである。文法分析に「かな」を使うのは大きな間違いである。そこで、第1の提言が行われる。

【第1提言】 文法を「かな」で表示するのをやめること

本来、音素を単位として分析すべき形態素が、実際は、拍でまとまってしまう「かな」で分析されてきた。その結果、動詞や形容詞の形態素が適切に把握されなかった。それどころか、形態素のあることすら認識されなかった。したがって、文法的な説明は、簡単なことでも、非論理的にむずかしくなされてきた。ローマ字を使いさえすれば、音素が正しく把握でき、説明が容易になる。

【第2提言】 動詞や形容詞、態詞なども形態素で把握すること

形態素で把握するということは、「読む」なら、yom-u と把握することである。「良い」なら、yo-ki と把握し、「飲ませる」なら、nom-as-e-ru と把握することである。

【第3提言】 「格」を「実体と属性の論理関係」と定義すること

「実体(名詞)」は「属性(動詞等)」と「論理関係」で結びつく。この「論理関係」を表すのが「格」である。格をこう定義すると、「01格」や「02格」が認識される。また、「の」は格を表さないことになる。

【第4提言】 時と相の関係を図で捉えること

テンスとアスペクトは図で示しやすいし、図で示せば簡単に把握できる。現代日本語特有の相対時表現のあり方も、絶対時表現と、図示の対比において把握できる。

【第5提言】 「動詞活用の歴史的単純化」に「動詞の態拡張」を見ること

動詞の活用は歴史的に単純化した。国語学はこれを日本語話者が「目的」としたこととみている。しかし、これは「動詞の態拡張」の「結果」である。「係り結び」も同様である。

E II 論文 「の」および「相対時表現」について

—日本語教育の現場で—

今泉 喜一

この論文は、日本語教師である前田公子さんが日々教室で教えながら考えていることを書き留めた覚え書きに基づいている。2つを選んで論文化した。(p.4「付記」参照)

「の」の意味については、使用例の出てくるたびに意味を教える傾向がある。すると、いくつの意味を教えればよいのか、という疑問が湧く。本論文では、「の」が構造上でどういうものかを示しつつ、学習者がどう把握すれば理解しやすくなるのかを示す。

「相対時表現」は学習者のとまどうところである。それというのも、相対時表現は現代語日本語特有の表現法であるからである。日本人の日本語教師にとってはあたりまえのことであっても、これは日本語特有の表現法なのであることを理解しておく必要がある。教師としては絶対時表現と相対時表現のあり方を図で理解しておくといよい。

E III 論文 「未遂」と「未婚」

—否定の接頭辞「未」の意味と構造—

木村 泰介

木村泰介さんは、前回の論文で、「無洗米」などの例に見られる、「無」の構造と時相について論じた。今回は、「未遂」や「未婚」の例に見られる「未」について論じている。「未〇」の「未」のあとにある名詞化した動詞について、①②のように分類している。

①動詞がアスペクトしか表さないものをAとし、アスペクトも事象の実質も表すものをBとした。

②「未」とともに用いることで、「開始に至らない」状況を表す動詞を1型とし、「開始はあるが、完了に至らない」動詞を2型とし、単に「完了に至らない」動詞を3型とした。

①と②の組み合わせで、動詞を6種類に分類し、この6種類をアスペクトの違いとして図で示した。「未」の意味が理解できる。また、「構造モデル」上で「未」をどう表せばよいのかも示している。「未」の日本語訳である「まだ～ない」の構造も示している。

E IV 論文 感覚動詞と知覚動詞のアスペクト

—局面指示体系による図示—

関口 美緒

関口美緒さんは感覚動詞、知覚動詞のアスペクトのあり方を図示している。構造伝達文法の図示法によるものだが、両動詞のこのような図示は、他の研究者の行っていないことであり、画期的なことであるといえる。本論文では、感覚動詞と知覚動詞を対比し、「継続動詞型」と「存在動詞型」では、図示に共通点があることを示した。しかし、感覚動詞には「瞬間動詞型」がないことを示し、知覚動詞ではこの「瞬間動詞型」に、閾値をもつ動詞と、もたない動詞があることを述べている。閾値の図示法も開発している。

語例検討という形で、「肩が凝る」の表現を7つの時相(テンス・アスペクト)において捉える必要のあることも論じている。

E V 論文 モンゴル語、日本語の主格・対格表示の対照

—「従属節内主格は主文内主格とは異なる」という意識—

銀 粧 / 今泉 喜一

銀粧さんの論文については p. 4 の「付記」を参照のこと。

【主格】 モンゴル語では、主文の主格語(主語)は、日本語古語同様、主格表示されない(の₁)。従属節では、主文と同じ主格語は省略されるが、異なる主格語は、対格で表示される。日本語では主文では「の₁」か「が」が、従属節では「が」が使用される。

【対格】 モンゴル語では、日本語古語同様、普通対格表示は行わない。対格表示が行われるのは特別な場合である。これに対して、日本語現代語では、口頭語では対格表示が行われないことも多いが、文章語では対格表示は省略されない。

【対照】 モンゴル語の従属節では、主格が対格で表示されるが、日本語古語にもこれがあつた。とはいえ、これは同じ経緯によるものではない。しかし、これにより、両言語に「従属節内主格は主文内主格とは異なる」という共通の意識が想定できる。

E VI 論文 日本語「の」と中国語「的」の対照研究

—「N+の/的+N」を例として—

辛 奕羸

辛奕羸(シン・イイン)さんは、認知言語学の視点から、日本語の「の」と中国語の「的」を対照している。両者の共通点として、2つの名詞をつなぐことをあげている。

相違点としては、「重点化」との関わり方をあげている。日本語の「の」は重点化とは関係なく存在する。中国語の「的」は重点化と大きく関わるが、重点化されるのが、前の名詞なのか、後ろの名詞なのかは、文脈が決める、としている。重点化のない場合は「的」が使えず、名詞を「的」なしでつなぐ。

また、2つの名詞が同格関係の場合や、異なる範疇に属する場合は、「の」でつなげても、「的」ではつなぐことができないとしている。

E VII 論文 日本語構造伝達文法の中国語への適用

—兼語句—

蔣 家義

蔣家義さんは、日本語構造伝達文法を中国語に適用することを研究している。すでに主述句、述目句、結果述補句については論じているので、本論文では兼語句を論じることとなった。(『日本語構造伝達文法・発展D』参照)

まず、「兼語句」が何であるかを説明し、次に兼語句を、[1]使役・許容、[2]心理、[3]認定・呼称、[4]描写・説明、の4種類に分類している。この[1]～[4]の兼語句のそれぞれの特徴を述べ、それぞれに使用される動詞を挙げた。

兼語句は、構造的には類似性があるが、意味的には違いが大きい。[1]～[4]の兼語句のそれぞれにつき、構造意味を述べている。この論述により、形式のみに焦点が当てられて、「兼語句」という概念にまとめられたが、意味的な観点からは今後さらなる検討がなされる必要があることが分かる。

EⅧ論文 中国語の「了」に対する日本語表現 孫偉

孫偉さんは中国語の時相表現について研究している。本論文では、中国語の完了・実現を表す「了」が、日本語のどのような表現と対応しているかを詳しく調査し、その対応関係を明らかにした。

調査に用いた方法は、日本語構造伝達文法の構造図形表示法と、2桁数による時相表示法である。小説等にある当該表現を研究資料とし、その資料の1つひとつにつき、この方法を適用して検討している。

その結果、明らかになったことは、p.124の表1のように示されることになる。その内容をここに簡単に示すことはできないので、「4 おわりに」を参照していただければと思う。「了」の表現することが、いかに多様なものであるかが分かる。

EⅨ論文 粵語麻垌方言の前置詞
—動詞と比較して— 陶天龍

陶天龍さんは中国語の方言を扱っている。粵語は広義的には中国語の1方言と見ることができ、狭義的には漢語と同系統の1言語と見こともできる。その麻垌(マトウ)方言は広西省麻垌鎮で話されている粵語の1つの方言である。その方言を扱う本論文では、例文が音声記号で記されている。それは、方言の発音は漢字で書けないものもあるからである。発音が漢字で書けない場合は、□で表し、その横に音声記号を付けることになっている。本論文に□があるのはこのためである。

この論文では、日本語構造伝達文法の構造モデルを使っているが、これには3つの主要な理由がある。この①～③は、本論文での考察を大いに助けるものとなった。

- ①格を示さなければならないこと、つまり前置詞を明確にしなければならないこと。
- ②同じ漢字で表されていても、動詞なのか前置詞なのかが位置で明確に区別できること。
- ③動詞にはない、前置詞にある制限が、このモデルを使うと説明しやすくなること。

[付記]

EⅡ論文 「の」および「相対時表現」について

この論文は本書に載せるつもりはなかった。『日本語のしくみ』の(6)あたりで、日本語教育関係のことがらが扱えれば、そのときにその体裁に合わせて載せようと考えていた。しかし、今泉も年で、明日をも知れない身となっているいま、ここに掲載しておくことにした。前田さんの覚え書きの中からは2つだけを選んだものとなった。

EⅤ論文 モンゴル語、日本語の主格・対格表示の対照

この論文は、銀桩さんが大学院論文集に書いたものに基づいている。銀桩さんの快諾を得て、今泉が構造図や表を加えたり、論旨をよりつかみやすくした。この形になったものを銀桩さんに見てもらい、さらに「研究者紹介」を書いてもらおうとしたら、連絡がつかなくなっていた。何もなければと祈るばかりである。

目 次

Eまえがき (1)

E I 論文	国語学への5つの提言 —文法はローマ字で—	今泉 喜一 (1)
E II 論文	「の」および「相対時表現」について —日本語教育の現場で—	今泉 喜一 (21)
E III 論文	「未遂」と「未婚」 —否定の接頭辞「未」の意味と構造—	木村 泰介 (33)
E IV 論文	感覚動詞と知覚動詞のAspect —局面指示体系による図示—	関口 美緒 (45)
E V 論文	モンゴル語、日本語の主格・対格表示の対照 —「従属節内主格は主文内主格とは異なる」という意識—	(59) 銀 桩 / 今泉 喜一
E VI 論文	日本語「の」と中国語「的」の対照研究 —「N+の/的+N」を例として—	辛 奕羸 (79)
E VII 論文	日本語構造伝達文法の中国語への適用 —兼語句—	蔣 家義 (89)
E VIII 論文	中国語の「了」に対する日本語表現	孫 偉 (105)
E IX 論文	粵語麻垌方言の前置詞 —動詞と比較して—	陶 天龍 (127)
Eあとがき	(151)	

◎ コラムの目次は p. 14 にあります。

論文目次

E I 論文	国語学への5つの提言	
	—文法はローマ字で—	今泉 喜一 …………… 1
E I O	国語文法の問題点 …… 文法をかなで扱っている (1)	
E I 0.1	国語辞典にみる問題点 (1)	
E I 0.2	「かな」使用をやめるべき、構造も示すべき (2)	
E I 0.3	活用表も改善すべき (2)	
E I 0.4	5提言 (3)	
E I	[第1提言] 文法を「かな」で表示するのをやめること (4)	
E I 1.1	表記……文はかなで、文法はローマ字で (4)	
E I 1.2	単純なものなのに…「かな」文法だから説明できない／複雑に表現 (5)	
E I	[第2提言] 動詞や形容詞、態詞なども形態素で把握すること (8)	
E I 2.1	形態素を詞とする (8)	
E I 2.2	形態素(1) 動詞 (8)	
E I 2.3	形態素(2) 形容詞 (10)	
E I 2.4	形態素(3) 態詞 (11)	
E I 2.5	形態素(4) 描写詞 (12)	
E I 2.6	形態素(5) 国語文法の「助動詞」を形態素表示 (13)	
E I	[第3提言] 「格」を「実体と属性の論理関係」と定義すること (14)	
E I 3.1	「格」の国語文法での定義 (14)	
E I 3.2	「格」の本文法での定義 (14)	
E I 3.3	格詞 (14)	
E I 3.4	構造上での「格」の示し方 (15)	
E I 3.5	文中での「格」 (15)	
E I 3.6	同名格 (15)	
E I	[第4提言] 時と相の関係を図で捉えること (16)	
E I 4.1	時の定義 (16)	
E I 4.2	相の定義 (16)	
E I 4.3	時・相の順で表示 (17)	
E I 4.4	時相表現の有無 (17)	
E I	[第5提言] 「動詞活用の歴史的単純化」に「動詞の態拡張」を見ること (18)	
E I 5.1	動詞の態拡張 (18)	
E I 5.2	「活用の整理」は目的ではなく、「動詞の態拡張」の結果である (19)	

E II 論文	「の」および「相対時表現」について —日本語教育の現場で—	今泉 喜一 …………… 21
1 「の」 (21)		
1.1	問題点 (21)	
1.2	日本語構造伝達文法での「の」の説明 (21)	
1.3	これまでの教育 (22)	
1.4	提案：「の」の導入のしかた (22)	
1.5	「の」表現には格助詞を補うとよい (23)	
1.6	「の」のその他の使用法 (23)	
2 相対時(相対テンス) (25)		
2.1	日本語は相対時表現が優勢である (25)	
2.2	絶対時表現 (25)	
2.3	相対時表現 (26)	
2.4	絶対時表現だけで表す (26)	
2.5	絶対時表現と相対時表現が同じになる場合 (27)	
2.6	絶対時表現と相対時表現が異なる場合 (28)	
2.7	教授者の留意したいこと (31)	
	参考文献 (32)	
E III 論文	「未遂」と「未婚」 —否定の接頭辞「未」の意味と構造—	木村 泰介 …… 33
1 「未」の意味を時間モデルで考える (33)		
1.1	検討の範囲 (33)	
1.2	「未」に後続する語 (34)	
1.3	「未」は「まだ～ない」の意味 (34)	
1.4	時間モデル (34)	
1.5	「未」の意味を時間モデルで考える (35)	
1.6	語の判定 (37)	
2 「未」の構造 (38)		
2.1	構造モデル (38)	
2.2	「未婚」の構造 (38)	
2.3	「未払い」の構造 (39)	
2.4	「彼01まだ結婚していない」の構造 (40)	
2.5	改めて「未遂」「未婚」の構造について (42)	
3 まとめ (42)		
4 今後の課題として (42)		
	主要参考文献 (43)	

E IV論文 感覚動詞と知覚動詞のアスペクト
 ー局面指示体系による図示ー

関口 美緒 …… 45

- 1 感覚と知覚と情動 (45)
- 2 感覚動詞と知覚動詞 (46)
 - 2.1 先行研究を参考にして表を作成 (46)
 - 2.2 表に示す (46)
- 3 感覚動詞と知覚動詞の局面を図示する (47)
 - 3.1 出来事を6つの局面で捉える (48)
 - 3.2 「動き」と「存在」 (48)
 - 3.3 時と相の組み合わせ (48)
 - 3.4 相で動詞を分類する (49)
- 4 感覚動詞の時相 (49)
 - 4.1 継続動詞型 (49)
 - 4.2 存在動詞型 (50)
 - 4.3 感覚動詞は継続動詞型と存在動詞型の2つを持つ (50)
- 5 知覚動詞の時相 (51)
 - 5.1 「閾値」で知覚か, 「物理的変化」で知覚か (51)
 - 5.2 「閾値」のある瞬間動詞型動詞 (51)
 - 5.3 物理的変化のある「瞬間動詞型」動詞 (52)
 - 5.4 物理的変化のある「継続動詞型」, 「存在動詞型」 (53)
- 6 感覚動詞と知覚動詞の異同 (53)
- 7 語例検討 (54)
 - 7.1 肩が凝る (54)
 - 7.2 「肩が凝る」に見られる7つの時相 (54)
 - (a) 時相表現 (54)
 - (b) 補助を伴う表現 (54)
 - (c) 繰り返しの表現 (54)
 - (d) 慢性の表現 (55)
 - (e) 相のみの表現 (55)
 - (f) 時のみの表現 (55)
 - (g) 事象単位表現 (56)
- 8 まとめ (56)
- 参考文献 (56)

E V 論文 モンゴル語、日本語の主格・対格表示の対照

—「従属節内主格は主文内主格とは異なる」という意識— …………… 59

銀 粧 / 今泉 喜一

- 0 はじめに (59)
- 1 主格語表示の対照研究 (59)
- 1.1 モンゴル語の主格語表示 (60)
- [1] 主文内にある主格語 (60)
- [2] 従属節内にある主格語 (61)
- 1.2 日本語の主格語表示 (62)
- [1] 古代語 (62)
- [主文内主格語] (62)
- [従属節内主格語] (62)
- [2] 現代語 (62)
- [第1主格] (63)
- [第2主格] (63)
- [第3主格] (63)
- 1.3 従属節の主格語と、主文の主格語が同一の場合 (63)
- 1.4 モンゴル語と日本語の主格語表示の対照 (63)
- 2 対格語表示 (64)
- 2.1 モンゴル語の対格語表示 (64)
- 2.2 モンゴル語で対格語を<1>対格語尾で表示するのは特定の場合 (64)
- 2.3 日本語での対格表示 (66)
- 2.4 対格語の表示を対照する (66)
- 3 従属節内の主格語表示の対照研究 (67)
- 3.1 問題点……「車を来るまで、～」 (67)
- 3.2 先行研究と本論文 (67)
- 3.3 従属節内の主格語表示の対格語尾“gi / yi”の出現環境 (68)
- [1] 「副動詞形」と「形動詞形」 (68)
- [2] 動詞の副動詞形 (70)
- [3] 動詞の形動詞形 (72)
- 3.4 二義性の出現する他動詞 (73)
- 4 古代日本語には従属節内対格形主格語があった……モンゴル語との対照 (74)
- [仮説] (74)
- 5 結論 (75)
- 参考文献 (75)

E VI論文 日本語「の」と中国語「的」の対象研究
 — 「N+の/的+N」を例として—

辛 奕羸 …… 79

1 はじめに (79)

対応する場合 (79)

対応しない場合 (79)

中国語の「N+N」 (79)

2 認知と言語の関係 (79)

2.1 認知が言語を生む (79)

2.2 認知から言語への過程 (80)

[1] [客観世界] の段階 (81)

[2] [認知処理] の段階 (81)

[3] [概念①] の段階 (81)

[4] [概念②] の段階 (81)

[5] [概念③] の段階 (82)

[6] [言語] の段階 (82)

3 日本語の「の」と中国語の「的」 (83)

3.1 対応する場合 (83)

3.2 対応しない場合 (83)

[1] 「の」は使えるが、「的」は使えない (83)

[2] 「的」は使えるが、「の」は多義になる (83)

4 「的」は重点のあることを示す (84)

4.1 「木头的桌子」(「N+的+N」) の重点 (84)

[1] 「N+N」 重点がない場合 (84)

[2] 「的」のあとに重点がある (84)

[3] 「的」のまえに重点がある (85)

[4] 中国語では、「的」が重点のあることを示す (85)

[5] 日本語の「の」は重点のあることを示さない (85)

[6] 文脈との関係 (85)

[7] 表で示す (85)

5 まとめ……「の」と「的」の類似と相違 (86)

類似点 (86)

相違点 (86)

参考文献 (86)

研究者紹介 (87)

E VII論文 日本語構造伝達文法の中国語への適用
 —兼語句—

蔣家義 …… 89

- 1 はじめに (89)
- 2 「兼語」という名称 (90)
- 3 兼語句の例 (91)
- 4 兼語句4種類のそれぞれの特徴4 (92)
 - 4[1] 使役・許容の兼語句 (92)

使役・許容の兼語句を作る動詞 (表3) (92)
 - 4[2] 心理の兼語句 (93)

心理の兼語句を作る動詞 (表4) (93)
 - 4[3] 認定・呼称の兼語句 (93)

認定・呼称の兼語句を作る動詞 (表5) (93)
 - 4[4] 描写・説明の兼語句 (94)
- 5 兼語句の意味構造 (94)
 - 5[1] 使役・許容の兼語句の意味構造 (95)

[主述句1] (95)
 - 5[2] 心理の兼語句の意味構造 (97)

[主述句2] (97)
 - 5[3] 認定・呼称の兼語句の意味構造 (99)

[主述句3] (99)
 - 5[4] 描写・説明の兼語句の意味構造 (101)

[主述句4] (101)
- 6 まとめ——4種類の兼語句の意味的な違い (102)

兼語句の概観, 意味構造および図示 (表) (103)

 - (1) 深層格 (103)
 - (2) 深層格 (103)
 - (3) 深層格 (103)

主要参考文献 (104)

E Ⅷ論文	中国語の「了」に対する日本語表現	孫 偉 …… 105
0	はじめに (105)	
0.1	“了” に対応する日本語訳の多さ (105)	
0.2	“了” の多種の役割 (106)	
0.3	“了 ₁ ”, “了 ₂ ”, “了 ₁₊₂ ” (106)	
0.4	日本語での研究 (106)	
0.5	本研究は構造研究法に基づく (106)	
1	両言語のテンス・アスペクト構造 (106)	
1.1	図による表示 (106)	
1.2	2桁数による表示 (107)	
2	基本的アスペクトの場合 (108)	
2.1	過去の出来事 (108)	
	過去動作完了 (108)	過去動作進行・完了 (108)
	過去結果状態継続 (108)	過去結果状態完了 (109)
	過去結果記憶継続 (109)	
2.2	非過去の出来事 (110)	
	現在動作完了 (110)	現在動作進行完了 (110)
	現在結果状態継続 (110)	現在結果状態完了 (111)
	現在結果記憶継続 (111)	現在動作(進行)完了 (112)
	未来結果状態継続 (112)	未来結果状態完了 (112)
	未来結果記憶 (113)	
3	派生的アスペクトと開始(後)の局面 (113)	
3.1	反復 (113)	
3.2	経験 (116)	
3.3	単純状態 (118)	
3.4	パーフェクト (119)	
3.4.1	“了” と「テイル」が表すパーフェクト (119)	
3.4.2	「タ」と“了” が表すパーフェクト (121)	
3.5	「タ」と“了” が表す開始(後)の局面 (122)	
4	おわりに (123)	
4.1	基本的アスペクト (123)	
4.2	派生的アスペクト (123)	
4.3	開始直後 (123)	
	中国語の“了”とその日本語対応表現 (表1) (124)	
	参考文献 (125)	

E区論文 粵語麻峒方言の前置詞
—動詞と比較して—

陶 天龍 …… 127

- 1 麻峒方言の概説 (127)
 - 1.1 粵語 (127)
 - 1.2 麻峒方言 (127)
 - 2 研究目的 (128)
 - 2.1 方言データを使う意義 (128)
 - 2.2 日本語構造伝達文法のモデル使用 (129)
 - 2.3 本稿の目的 (129)
 - 3 フィルモアの格文法 (129)
 - 4 格形態・格接辞・接置詞・格助詞 (130)
 - 4.1 格の表示法 (130)
 - 4.2 接置詞 (130)
 - 4.3 日本語の格助詞 (131)
 - 4.4 文法化の傾斜 (131)
 - 5 麻峒粵語の表層格—接置詞 (131)
 - 5.1 前置詞は動詞から、後置詞は方位名詞から (131)
 - 5.2 本稿は前置詞のみを扱う (132)
 - 5.3 主語、目的語のあり方 (132)
 - 5.4 主語・(直接)目的語・間接目的語の格を示す前置詞は0で示す (133)
 - 5.5 他の深層格 (133)
 - 6 麻峒粵語の動詞と前置詞 (139)
 - 6.1 動詞と前置詞の区別 (139)
 - 7 必須要素・修飾要素 (142)
 - 7.1 自動詞文・他動詞文・複他動詞文 (142)
 - 7.2 副詞 (143)
 - 7.3 重複 (143)
 - 7.4 アスペクト助詞 (144)
 - 8 麻峒粵語における動詞と前置詞の違い (144)
 - 9 麻峒粵語における前置詞の制限の理由 (145)
 - 9.1 前置詞の制限 (145)
 - 9.2 文頭への移動(主題化) (145)
 - 9.3 削除 (146)
 - 9.4 名詞句の主要部への転換 (147)
 - 10 まとめと今後の課題 (148)
- 参考文献 (148)
- 研究者紹介 (150)

コラムの目次

コラムの執筆者は今泉喜一

- コラムE1 国語文法への5つの質問 (7)
- コラムE2 国語文法の断捨離すべき不要な概念, 用語 (20)
- コラムE3 国語文法は裸の王様? (44)
- コラムE4 日本語は幸いにも膠着性を保つ (58)
- コラムE5 日本語構造伝達文法は唯一の日本語科学文法 (77)
- コラムE6 形態素こそが基本 (78)
- コラムE7 文法ホームページの突然の消滅……更新 (88)
- コラムE8 「日本語構造伝達文法」の著作 5+6 (126)